

特別テーマ展関連講座

—押出遺跡の6次調査と山形県内の縄文前期後半の世界—

講義5

山形県内の前期後半の石器製作と組成

山形応用地質研究会

秦 昭繁 氏

平成30年7月22日（日）

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

石材資源環境から見た押出人の生活

—考古学研究は原始世界のなにを語っているのか—

秦 昭繁（山形応用地質研究会）

1 はじめに

珪質頁岩は、石器時代に東日本で剥片石器の素材として利用された石材である。この珪質頁岩の資源環境を人々は、どのように捉えて利用したのか。長年の研究課題であった。昨年、四国・九州の石材の原産地を調査する中で珪質頁岩の賦存環境の特異性について考えた。この資源の特異性に注視して押出人の生活について捉えてみたので、その内容について報告したい。また、考古学の石器研究によって捉えられた内容は、現代という社会の中でなにを語っているのだろうか。原始社会を研究する意義などについても捉えてみたい。

2 「河川資源」・「山体資源」について

珪質頁岩の分布は、地質構造が重要な決め手となっている。東北地域に広域的に分布している新第三紀の女川層のノジュールや、地層の特定部分の珪化作用で形成されている。このように東北地方の何処でも採取できる物でなく、日本海側を主体に限られた範囲の河川を中心に分布していることが判明している。また、形成環境がノジュールや特定地層の珪化作用のために大規模な産地を形成せず、資源量が少ないことも特徴である。結果、珪質頁岩の原産地は分散し小規模で産地当たりの資源量が少ない。この点は、火成岩の大規模な岩体を形成している、サヌカイトや黒曜石の石材と大きく異なる特徴と言える。

珪質頁岩を包蔵している母岩が、頁岩・泥岩・凝灰岩の硬質で石器時代の道具や技術では、採掘が不可能な状況にあった。石材資源とするには、原石が河川の開析や風化によって自然と崩落するのを待つしかなかった。結果、当時の人々が原石を採取することが出来たのは河川で、転石となった物の利用が主体で、これが最も効率的な採取方法であった。

河川礫は転石になり砂礫によって円磨され、表面から内部に潜在割れが形成される。不規則な潜在割れは石器を製作する時に予想に反する割れを生じやすい。硬質で良質な石材ほど潜在割れは深く、致命的に剥離のコントロールを難しくする。これを避けるためには、表面の円磨を受けている自然面の周辺を除去する必要がある。このような特徴を持つ珪質頁岩を「河川資源」と捉える。

サヌカイト・黒曜石はスポット的な岩体として形成される資源である。特にサヌカイトは西日本の中央構造線の南部に分布している。九州から近畿地方の多久・五色台・金山・二上山などが知られている。ここでは、山腹・山麓で崩落した原石を採取することができる。岩体として原石が多量に存在しており、山麓で転石化が進んでいないために潜在割れも少ない原石である。このような資源の特徴を持つサヌカイト・黒曜石を、「山体資源」と捉える。

3 押出人の生活を石器研究から捉える

押出人の生活を珪質頁岩の「河川資源」という視点から観るとどのように語ることができるのか。

3-1 石器はどのように作られるのか

最初に、石器はどのように作られるのか。それを確かめるには、実際に石器を作ってみた。当時の道具や身体技法など欠落資料が多く不明な点も多い。しかし、石や鹿角などを駆使して石を割って実験を繰り返した。結果、一個の石器を作るには、膨大な剥片が発生すること。形態は段階をおって調整され形がととのえられ、その過程で未製品・失敗品も発生することが判明している。また、原石（河川転石）からの初期の発生剥片は、不定形で厚い剥片が多く、形成が進むと整ったポイントフレイクに変わっていくことも観察できた。

3-2 押出遺跡の石器

上記の観察を踏まえて押出遺跡から出土している石器・剥片を観察すると、どのようなことがいえるのか。

押出遺跡の資料の最大の特徴は、原石・大型剥片・未製品の物が極めて少ないと言うことである。原石から一貫して石器を生産した痕跡は、認められていない。製作の前半部の資料が欠落している。未製品という形で石器を搬入し押出型ポイントを製作するシステムを発達させた。発生する小型の剥片を利用して石匙・石鏃・石錐を製作している。また、押出型ポイントは、押圧剥離によって刃部再生を繰り返し形態が小型に変形したものや、他の器種に再利用されて形が変形している。使用によって切れなくなった刃部を再生し、リサイクルを発達させて利用した姿が確認されている。

原因は、押出遺跡周辺の河川では、押出型ポイントを製作するための珪質頁岩が採取できない。遺跡周辺で唯一確認される石材は、吉野川の黒色頁岩であり、押出型ポイントには殆ど利用されていない。

3-3 未製品を作った原産地はどこか

石器製作過程の前半部の欠落している資料を製作した場所はどこか。珪質頁岩の分布調査によって、米沢盆地西部地域に原石が存在していることが判明している。最近、この原産地の1つである飯豊町の中津川地域が飯豊町の教育委員会によって調査されているので紹介したい。

中津川地域では上屋地B遺跡の砂礫層から石器が出土することが知られていた。また、谷底平野の河床面から石器・剥片が採取出来ること判明している。最近、近くのヤルミ沢の露頭が発見され、砂礫層から円磨の進んだ石器・剥片が多量に発見された。この露頭の調査によって¹⁴C年代が測定された。石器の出土する砂礫層は3・4層で年代幅があるが、測定されたサンプルの1つは6110±25yrBPを示し、縄文時代前期を示す年代である。また、確認された石器・剥片資料は、原石からの剥離初期に発生する不規則な厚い剥片が多い。石器未製品が確認された資料内容から、原産地遺跡を示す資料群である。このような点を考慮すると米沢盆地の沖積地側にある遺跡に、未製品を供給した可能性がある。また、珪質頁岩は「河川資源」であり、河川の砂礫層との関わりも注意する必要がある。

3-4 珪質頁岩地帯の原産地遺跡

ヤルミ沢に類似した事例は、東北地方の珪質頁岩の河川調査を目的に実施した時に、幾つかの河川で確認している。

秋田県の三種町の小又川や青森県の蟹田川の支流の小河川の河原に円磨を受けた大量の剥片や石器の未製品を確認している。河川に剥片・石器・未製品が確認される事例は、縄文時代の人々の利用形態を示している。土器などの遺物は少ない傾向にあり、小規模の集団の短期間

の利用形態を示している。確認されている剥片は、原石から未製品を作る時に発生する不規則で厚い物が多い。資料群は、原石から未製品を製作することを主体とした原産地遺跡の姿を示しており、地域の主要な珪質頁岩産地に当たっている。河川周辺に原石が存在する「河川資源」であることが、砂礫層や河床面の円磨を受けた石器・剥片と因果関係を形成している。

4 交易によって流通した石器

交易によって流通した石器研究からどのような関係を捉えることが出来るのだろうか

珪質頁岩によって作られた押出型ポイントは、広域的に分布していることが判明している。大工原氏の関東地域の調査によって類似した形態をもつ模造品も作られていることが判明している。既に述べたように押出遺跡では、再生を繰り返した単なる消耗品であったものが、交易品の彼の地では、異なった意味合いを付与された可能性がある。

押出遺跡の磨製石斧は、在地産の石材で作られたとみられる資料は4.6%程度で、遠隔地石材の蛇紋岩（透閃石）93.1%アオトラ石2.3%となってい。押出人にとって磨製石斧は、交易によって手に入れる道具で、自分たちが製作するようなものではなかった。この互酬性を支えた対価は、恐らく珪質頁岩の押出型ポイントの可能性が高い。拠点集落の押出遺跡を維持するためには、交易関係で生活を維持している姿が推察される。このように捉えると珪質頁岩製の押出型ポイントは、集落を支える重要な特産品であり、交易品を取得するために必須な製品であった。

5 石器研究によって語られること

以上のように押出人の生活を出土資料や周辺の石材調査によって語る事が可能ではないか。しかし、このような思考が成立している背景はなんなのだろうか。

歴史は人類史だけでなく生物史・宇宙史など多くの変化の総体に付けられた呼称である。この歴史は偶然の組み合わせによる変化の総体で不可逆性を持っている。二度と同じ組み合わせがないし、一方行の変化の総体である。自然科学の「エントロピー増大の法則」に近い関係を持つ変化である。現象に再現性がなく自然科学的な実証性が困難な点であるために、記述的に述べられる方法が重視される。

このように捉えると人類史は現代からしか語れないのではないか。現代は不合理を悪として、合理性・整合性（論理性）・経済性に高い価値を示す協同幻想社会である。そして、原始社会をこのような論理で理解しようとしている自分がある。現代という社会にドップリと浸かって、考古資料を現代的な価値観から観察している。

歴史的に欠落した世界観や世間の肌感覚を、論理的に補う方法を知らない。歴史的なアイヌ社会や原始社会も当時の世界を形成していた関係性にドップリと浸かった社会であった。現代の価値観から考古資料を眺めた世界が、先にお話した押出遺跡の縄文人の姿であったことを確認して終わりとしたい。

(2018. 7. 22)

文献

大工原豊 2008 『縄文石器研究序論』六一書房

栗島義明 2014 「緑色片岩製石棒の生産・流通」『駿河台史学』第150号

秦昭繁 2018 「珪質頁岩産地における石器を含む砂礫層」『東北日本の旧石器時代』六一書房